

評伝 三 関 鼎 州

— その遷都百周年に当って —

会 員 羽 柴 弘

龍鼎山養賢寺第十七世の住職、三関鼎州とは、どのようなお方であつたか。佐伯の人々はおまわり知らない。今年は遷化なさつてちようど百年にあたり、去る四月二十日には養賢寺で、鼎州和尚をまつる齋会が行なわれた。

史談会からは、高木会長以下数名のものが参列したが、この際若干の史料をさぐつて誌上に載せ、鼎州和尚の業績を思ひだしたい。

鼎州は尾張(愛知縣)の生まれであるというが、その出生、そして幼少の日からの生い立ちや、僧籍について身置き、置き、どういふ寺で修業なさつたか、資料が乏しく、いまこれを詳らかにすることは出来ない。

鼎州が養賢寺に入られたのは嘉永年間らしく、推されて第十七世の住職として法燈をついだが、安政三年(一八五六)八月退隠して京都に上つてゐる。

元治元年(一八六〇)攘夷討幕の急先鋒であつた長州藩の朝議急変して排されたので、これを不満とした長州藩の兵が、禁裏(禁裏)にせまり、薩摩・会津両藩の兵と戦い、遂に敗退した。しかし禁裏に銃火を向けた罪は重いと、第一回の長州征伐が行なわれることになつた。

幕府は二十一年か國の大軍を催し、尾張大納言徳川慶勝を征討総督として、長州に向つて進軍をばじめた。しか

し、これは国内戦である。総督慶勝は、戦わずして勝利を収めるの方策をとりたかつた。当時の江戸幕府は、内憂外患交々に到り、難問山積、しかも統率のむづかしい連合軍である。とて大規模な戦事は出来ない状態であつた。

幸い京都に住んでゐた鼎州は、生國が尾張であり、慶勝は面識もあつた。鼎州のすぐれた人材であることに着眼した慶勝は、鼎州を呼んで、困難な時局を收拾することを依頼した。

鼎州は総督の意を体して単身長州に乗り込み、事を平和の裡に解決しようとして、交渉にかかつた。

まず長州藩の国老吉川監物に会い、自分は豊後佐伯養賢寺の隠居僧鼎州であると名乗り、世界の情勢と天下の形勢から國家の大事を説き、今こゝで長州藩が意地を張つて反抗することは、徒らに人々を争亂の渦中に追いつみ、貴重なる命を数多く失ない、長州藩の運命を危うくするだけでなく、ひいては日本全國の安危にもかかわる。今はその大事な瀬戸際に立つてゐることを、真心をかたむけ、熱心に説いた。

しかし、征討連合軍を國境に迎え撃ち、徹底抗戦することに気負い立つてゐる長州を、恭順の方向にみちびくとは、容易なことではなかつた。しかし鼎州が理非を正し、熱情を傾けての説得に、吉川監物の心は、ついに傾いた。

監物は、まず藩主毛利敬親父子を説き伏せ、藩論を抗戦から恭順に変え、使いを征討総督の軍門に遣わして和を乞ひ、遂に重臣の福原・国司・益田らに死を命じ、降伏して事態を平和の裡に解決した。鼎州がこの間に介在して奔走し、收拾にあつたればこそであつた。

こうして、第一回の長州征伐は、戦亂の惨禍を見るこ

となしに、無事解決した。

この長州開罪の使者を、西郷吉之助(南洲)とする史家もあるが、それは誤りで、鼎州が岩國に行つてこの大役を果したのである。

總督徳川慶勝は鼎州の功を賞して、袈裟・文台・硯箱・書檮、並びに年五十石を贈つた。これらの品は、今も養賢寺に秘蔵されているが、見事な逸品であるという。

養賢寺の記録によると、鼎州は安政三年八月養賢寺を退隠して上京、元治元年前記のように長州説得に奔走し、その後も滞おたまるとまゝなかつたが、慶応三年、徳川幕府の崩壊、王政復古の大号令が出たのを見て、又し振りに佐伯の養賢寺に帰つた。

その後、明治三年十月、鼎州は佐伯を後に、再度上京している。これは同年の禁固騒動に關係があつて居づらくなり、直前に佐伯を去つたものとされている。

それからの鼎州は、京都妙心寺の龍泉庵に隠棲し、明治七年六月癸を以て没し、同寺に葬られて波瀾の生涯を終つてゐる。

このように、明治維新の前夜、僧鼎州は國事に奔走した力であつたが、私どもは、鼎州の出自や幼少時代、さらに僧侶としての修業歴などを詳しく知りたいたい。同様にその静かな晩年、遷化前後のご様子など、あまりにも知らな過ぎる。

龍鼎山養賢寺の歴代住職については、高德をもつて伝えられてゐる方が多く、また佐伯に金石の文字を残さずにいる方が多い。いま鼎州和尚の百年祭に当り、私どもはあらためて、國事に尽くしたその生涯を、もつともっと身近に知らなくてはならないと思つた。

(大分県歸入会・増村氏、佐伯脚書)及び「佐伯市史」による。

旅行記

臼杵石仏から内山観音へ 青山巽次郎 犬良 善男

去る四月十日、私共黒沢の老人クラブ一同が、楽しんでいたバス旅行の日であつた。臼杵から三重、そして三國峠をめぐる観桜もかねた研修旅行であつた。

午前七時半出発、参加人員三十五名、貸切バスは佐伯から国道二一七号線を走る。上浦海岸から峠を越え、津久見からまた峠を越したが、さすがは国定公園の海岸の絶景である。舗装は出来てゐるがカキガシの連続である。

十時少し前、臼杵石仏に着く。マイクを肩にした案内者がなれた口調でまくし立て、七、八回も「日本」という言葉を使った。僕は石仏は三度目、しかし初めての人が多く、随分珍らしく観たようであつた。案内者は「炭焼小五郎」の伝説もつけ加えたが、僕にはよく判らないが、事実かも知れないと思つた。

再びバスに乗つて、十二時前三重町に入り、内山観音に参拝した。寺の境内一面に咲き競う桜にまず眼を奪われた。本堂をはじめ数々の建物、さすがに歴史の古さがかがえる。天気はよし、桜は満開、よく調査のとれた光景に、みんな今日の仕合せを満喫した。

「お晝は峠で……」ということ、バスは峠道をたどる。延々とつづく桜、峠近くは少し早いならぬと予測も裏切られ、頂上まで爛漫たる花のトンネルであつた。

晝食は三國峠頂上の広場、ここは西南戦争の古戦場であるが、その草原で楽しい酒肴に舌鼓とつ。酒もすすいだので老人らしい悪声をはりあげて、歌が出る、詩吟がはじまる……。

それから宇目町に下つて、無事夕方帰宅した。(終)